

【論文】

日露戦争期の少女雑誌における領域としての〈ロシア〉

——「少女界」を例に

溝 渕 園 子

The Subject of Russia in the Period of the Russo-Japanese War : A Case Study of a Japanese Girls' Magazine

Sonoko MIZOBUCHI

要旨

During the short span of two wars, the Sino-Japanese War (1894-1895) and the Russo-Japanese (1904-1905), victorious Japan began to perceive itself as an equal member among the ranks of modern Western countries. Having self-confidence brought on by the success of the two wars, the concept of “world map” (Andou, 1998) changed in the minds of the Japanese in terms of cultural and political status. This attitude was reflected in the education of young people. For example, at the beginnings of both of those wars were boys' and girls' magazines.

The aim of this paper is to examine how the cultural images of Western countries had been formed in “Syujio-kai”, a Japanese girls' magazine, before and after the Russo-Japanese War. In the publication, there is information about girls' schools and institutions of higher education, cautionary tales by experts, news, reports on various topics, a corner for the readers' contributions, and the introduction of foreign culture. Thus, by extracting the images of Russia from this magazine's materials, we are able to locate cues into the thinking of how Western countries were perceived in modern Japan.

In this paper, from the viewpoint of comparisons with a boys' magazine, I analyzed what images of Western countries are depicted in both magazines, and what images are not shown in a girls' magazine compared with a boy's magazine. Through this analysis, I tried

to concretely consider the images of Russia structured by the media, i.e., girls' magazine in the Meiji Era. Moreover, by exploring the materials, several issues of gender concerning the culture surrounding modern Japanese magazines will be brought up.

キーワード：近代、日本、欧米、日露戦争、イメージ、ジェンダー、メディア、領域

はじめに

日清戦争（一八九四～九五年／明治二七～二八年）および日露戦争（一九〇四～〇五年／明治三七～三八年）で勝利をおさめた日本が、欧米列強諸国との関係において対等な位置にあるとの自覚を強めていくようになったことは、従来述べられてきたとおりである。明治初期のよく知られたスローガンに「脱亜入欧」があるが、両戦争の結果は、その実現の一形態と見なされる面もあった。これら二つの戦勝から得

た自負により、日本における世界各国の文化的・政治的な位置づけ、つまり日本人の心象概念としての「世界図」¹は変化したといえよう。

このように、欧米列強諸国との新たな関係の構築に対する意識が、日本国内で高まりを見せていった。そうした意識は、青少年教育をめぐる当時の時代状況にも反映されている。両戦争の開始期に合致するかのように、少年雑誌と少女雑誌がそれぞれ創刊されたことはその一例であろう。「少年世界」を代表とする少年雑誌の刊行が日清戦争と同時代的な展開を見せたのに対し、明治期の少女雑誌の登場は、日露戦争前後と機を一にしていた。

少女雑誌、すなわち高等小学校や女学校の一〇代の女生徒を主な読者対象に想定した雑誌は、明治三〇年代（一八九七〜一九〇六年頃）に創刊ラッシュを迎えた。この現象については、女性の教育水準の上との関連が、すでに指摘されている。²ここでは、「少女界」や「少女世界」、「少女の友」といった、〈少女〉と定められる人々を対象に見すえた雑誌が、日露戦争期をさむような形で、一つのジャンルを形成するメディアとして、〈少女〉をめぐる雑誌文化の歴史の中に位置づけられる。

こうした先行論をふまえた場合、少女雑誌は、どのような「世界図」のメッセージを、〈少女〉に向けて媒介する役割を担っていたのかという問題が浮上してくる。どのような文化概念としての「世界図」が、新たに立ち上げられたカテゴリーとしての〈少女たち〉の間で共有されていたのだろうか。また、日露戦争のプロセスと密接にかかわりながら、「世界図」はどのような構造化の道を辿っていたのだろうか。わけでも、「少女界」は、日本最初の少女雑誌であり、「少女世界」（日露戦争終結の一年後である明治三九年／一九〇六年九月創刊）にとつてかわられるまで、少女文化にもっとも影響を与えた雑誌だと見なされている。それは、御伽噺や小説、教養的な内容の読み物、学校

紹介や上級学校進学に関する情報、年中行事に寄せた識者からの訓話、種々のニュースや報告、各種の投稿欄、外国文化の紹介等で構成される。御伽噺や小説の内容面を見ていけば、学問によって出世した女性の物語を比較的多く掲載することで勉学を勧奨したり、前近代の孝女列傳像を再三紹介することで模範的女性像を提示したりするという傾向が認められる。ここには、少女にふさわしい〈教養〉や〈啓蒙〉の必要性といった観点が組み込まれていよう。本稿では、そうした価値や動機に根ざしたロシア像の構成および提示された内容自体に着目したい。この雑誌を素材として、ロシア像を抽出することにより、近代日本ではどのように諸外国が位置づけられていたのかを知る一つの手がかりが得られることが期待される。

本稿では、〈少女たち〉に心象概念としての「世界図」が形成される際に、少女雑誌が情報メディアとして一つの役割を担ったという視点に立つ。その上で、「少女界」（明治三五年／一九〇二年創刊）において、まず、日露戦争前後に構築されていく諸外国との関係の中で、日本にとっての直接的な交戦国であったロシアの形象を検討する。こうしたロシアにまつわる国家的・社会的・文化的・民族的・歴史的事象に関わる言説を資源として、総体や概念としての〈ロシア〉が少女文化の中でどのように立ち上げられていったのかについて考察する。つづいて、部分的にはあるが、少年雑誌のロシア像との比較の視座から、双方の雑誌での文化的イメージの差異についても言及する。それを通して、明治期の少女雑誌というメディアによって立ち上げられた〈ロシア〉という問題領域を、ジェンダーを視野に入れた検討へと展開させる端緒としたい。

一、「世界図」における〈ロシア〉の位相

「少女界」は、日露戦争開戦の二年前、明治三五年（一九〇二年）に金港堂より創刊され、少女雑誌の先駆けとなった、明治期の有力な児童雑誌である。金港堂からは、他に、「教育界」、「少年界」、「青年界」、「婦人界」、「文芸界」、「軍事界」が同時創刊されたが、ここに「少女界」を加えて七大雑誌とされる。「少女界」は、月一回発行、一〇銭で販売された、日本初の少女専用の雑誌であり、読者対象も一〇代が中心と見られる。³ 大正元年（一九一二年）九月発行の最終号に至るまでの約一〇年にわたり、少女たちに愛読された雑誌である。

日清戦争から日露戦争に至る過程で、明治期のジャーナリズム界には、ある種の高揚と成熟が見られた。それは、〈戦争〉という題材への興味から新聞に対する関心が呼び起こされ、〈活字文化〉の日常生活への登場をもたらすものだったとされている。⁵ また、明治三二年（一八九九年）の高等女学校令やそれに伴う府県立高等女学校数の急増等に見られるように、明治三〇年代は日本の近代教育史上、女子教育の勃興期であった。そして、女性のライフコースの中に、大人になるまでの猶予ないし準備期間として、〈少女〉時代と呼ばれる期間が設定されることとなった。⁶

そうした教育界における女子教育振興の趨勢に合わせる形で、高等小学校や女学校の生徒が中心をなす、いわゆる〈少女たち〉を読者対象とした雑誌が発行されるようになる。「少女界」、「少女世界」（一九〇六年／明治三九年～一九八六年／昭和六一年）、「少女の友」（一九〇八年／明治四一年～一九五五年／昭和三〇年）などの少女雑誌が、日露戦争期を挟むようにして創刊ラッシュを迎え、一つのジャンルを築いていった。それを成り立たせた背景には、読み書き能力を身につけた〈少女たち〉の誕生があったことは論を待たない。こうして、制

度的な意味での〈少女〉時代が生まれ、独立した読者としての〈少女〉の存在が可視化されることになった。⁷ その意味で、この時期は、内容面および表現面で、雑誌の性差・年齢による区分が強化され始めた時期と見ることができらるだろう。

言うまでもなく、日露戦争は、近代化の流れの中で、日本と帝政ロシアとが満州・朝鮮支配をめぐる覇権を争った戦争である。それは、明治三七年（一九〇四年）二月四日の御前会議においてロシア政府との交渉を断絶し、軍事行動の開始を日本政府が決定した時点から、翌三八年九月のポーツマス講和条約が締結される時点に至るまで、約一年七ヶ月に及ぶものであった。そうした中、日露戦争前より刊行されていた少女雑誌は「少女界」のみである。よって、本稿では、日露戦争前後のロシア像の推移を検討するにあたり、明治三七年一月の創刊号から三八年二月までの「少女界」計一三冊⁸を調査対象とした。

では、「少女界」は、心象概念としての〈世界〉をどのように提示し、その中でいかなるロシア像を描いていたのだろうか。「少女界」が媒介する「世界図」を取り上げ、以下それについて考察を加えたい。「少女界」において、語彙レベルで「露西亜」等の〈ロシア〉関連語と並んで目につくのは「世界」である。それは、時期的には、主に明治三七年の日露戦争直前から翌三八年にかけての戦中期の巻号に散見される。たとえば、「をしへ草」欄に「今は世界の文明国では何処でも仲間入りしてある赤十字といふ戦争の時に傷ついた兵隊などを助けて敵味方の別なく十分に療治をしてやる社は……」⁹（第三巻第一号、明治三七年一月十一日）という赤十字社を紹介する一文がある。ここでは、地理上というよりむしろ概念としての「世界」が示され、それが「文明国」という語と連結し、そこに加わるためには「赤十字」社が必要条件であると述べられる。こうした修飾語句は、一見この「社」を紹介するに過ぎないかのようである。だが、そこには、「世界」

を「文明国」と非「文明国」とに分割する視線が前提として仕組みられており、また当時すでに赤十字社を有していた日本を「文明国」の有資格者であると見なしたいという欲望が内包されている。

また、明治三十七年から翌三十八年にかけての「少女界」に登場する主な外国は、本稿の調査の限りにおいては、イギリス（「我同盟国」、「日英同盟」を含む）及びロシア（「露国」「露西亜」「ろしや」「ロシヤ」「ロスキー」）、中国（「支那」）であり、それぞれ九件、二七件、九件の言及が確認された。この時期の「少女界」の「世界図」は、全般的に欧米が中心であると見られ、中国（「支那」）が単独で扱われたのは写真を含めた四件であり、日露戦争から日清戦争へと遡る過程で派生的にあらわれるという形の方が多く見られる。次いで、アメリカ、スペイン、フランス、ベルギー、イタリア等である。よって、日露戦争期の「少女界」における「世界図」は、イギリスとロシアが主軸となつて構成されていると言つても差し支えないだろう。

それでは、心象概念としての「世界図」の中で、イギリスとロシアの位置づけは、各々どのようなものであったのだろうか。

日露戦争期の「少女界」において、イギリスに関する記事は、日英同盟、赤十字社、皇族との交流、社会情勢や学校の紹介に関連したものであり、一方ロシアに関する記事は、大半が日露戦争に関係するものであった。また、イギリスについてはロンドン市街や皇太子の写真が掲載される等、視覚的なイメージ化が、都市空間や建築、人物というように、いくつかわりエーションを持たせつつ図られている。それに対し、ロシアに関しては、本稿の調査の範囲では、ステッセル將軍の写真が唯一のものである。これを除けば、日露戦争で軍功をおさめた日本人軍人とその家族の写真が大勢を占めている。そのように見た場合、ロシアとは、知るべき対象としてではなく、あくまでこうした戦争に関わる日本人の写真を媒介する動機として機能していたと考え

られる。

また、日露戦争前後の「少女界」に顕著に見られる傾向の一つに、日英同盟への言及の反復が指摘できよう。その例として、戦前の「唱歌日英同盟」の紹介や「日英協約の解」（いずれも第三巻第一号、明治三五年四月）の記事、「英国の先帝ヴィクトリア女皇」の幼少時の写真（第一巻第五号、明治三五年四月）、そして戦後の「英国の艦隊」（第四巻二二号、明治三八年一月）の写真などが挙げられる。これらは、イギリスの政治や社会の紹介を交えつつ、日本とイギリスの〈交流〉が、文字テキストや写真を用いて、具体的に形象化されるよう構成されている。

こうしたヨーロッパの「文明国」である英国との同盟関係を繰り返して確認する行為は、戦中期に入ると、敵国ロシアをヨーロッパは異なるものとして位置づけるべく、ロシアの異質性を強調する言説へと推移していく。たとえば、日露戦争中の「学芸」欄に、理学博士による「世界一周人種の話（続）」（坪井正五郎、第四巻第七号、明治三八年六月一日）の記事では、ロシアやアメリカを中心とした地理・民族が紹介されている。ここでは、「露西亜人」を主とする「スラブ」はヨーロッパ人と比べて「似ているが何かしら顔つきにおいて劣つて」おり、「文明化が遅」れていると価値付けられ、「異人」「土人」と記されるアメリカの「インディアン」と同じカテゴリーに組み入れられる。

赤十字社を擁する「文明国」イギリスと、ヨーロッパ人と似て非なるロシア人が主民族である非「文明国」ロシア。「文明国」という価値に根ざして分割される二つのカテゴリーにおいて、ロシアは、異質なものとしてヨーロッパから排除され、その圏外に位置付けられているのである。そして、〈先進国ヨーロッパ〉と〈後進国ロシア〉という対比の構図が成立する「世界図」の中で、日本がどこに位置づけら

れるかについて明示されてはいない。だが、「文明国」イギリスとの同盟関係が強調されることよって、日本はそこに間接的に対峙していると考えられよう。そこから、欧米と社会的・文化的な視線を共有しつつ、同盟という国家的関係を支軸に、自らを「世界図」の中に優位に措定しようとする欲望が浮かび上がってくる。

「世界」を二分した各々にイギリスとロシアを対置させるような、概念上の地理において、他の欧米諸国に目配りしながら、いかに日本という自己を描き込むかということが、ここで問題として意識されるようになってくる。それは、三島霜川「八幡鳩」(「少女界」第四卷第八号、明治三八年七月)の中で巧みに寓話化されている。

この御伽噺は、陸軍の伝書鳩の座を、より優秀な白耳鳩（ペルギ）に奪われた日本鳩の悲嘆と奮起の物語である。白耳鳩が有能な伝書鳩として日本陸軍で活躍する様子に、日本鳩は「日本の国の恥だ！日本の鳩の名折だ！」と落涙する。「日本の鳩だつて立派に役立つことを見せて遣りたいものだ」と一念発起し、白耳鳩の練習場に見学に行く。だが、その闊達な様子に、「大層羨ましく思つて、ぼかんとして見物」していたところ、「日本の馬鹿鳩かい」と馬鹿にされてしまう。「日本鳩には、大和魂があるんだぞ。私は八幡様のお使番をした鳩の息子だ」と精神論を前面に打ち出して抗するが、喧嘩に負けてあえなく退散する。後日、一羽の白耳鳩が、大鷲に襲われ傷ついた際に、日本鳩が手当てしてくれたことに感動し、その返礼として日本鳩に伝書の術を伝授し、両者は仲間になり陸軍で力を合わせて働くようになるのである。なお、この話には、軍服を着た鳩の挿絵が添えられている。

このように、「八幡鳩」の物語は、単純化すれば、洋装した日本の精神性という、明治の近代化をめぐる一つの流れである(和魂洋才)の寓話と捉えられる。それとともに、欧米列強諸国に加わりようとする際の日本の現実が描かれてもいよう。先年の冷遇に対する悲嘆や恨み

を水に流して誠意を尽くせば、相手にそれが通じ仲間に入れてもらえるという、情緒的かつ教訓的な寓意も含まれていると解釈できる。こうした見地に立てば、日露戦争も終盤期の日本が直面した、「世界図」の中に自らをいかに記すかという問題が、この少女向けの御伽噺にも反映されていると考えられよう。

とはいえ、日露戦争後になると、「少女界」において、(ヨーロッパと日本)というように、ヨーロッパの対置概念としての日本を明記した部分が見当たらない。それは、おそらく、戦前に同盟という外交条件を柱に規定され強調された対等関係が、ロシアに対する戦勝から得られた自負によって、あえて記述せずとも、一定の範囲で確保されるようになったからではないかと推測される。

それでは、イギリスをヨーロッパの代表として優位に置き、ロシアを非ヨーロッパとして劣位に対置させる概念的図式において、「少女界」のロシアはどのような像を結んでいたのだろうか。

「少女界」にあらわれるロシアとは、概ね、日露戦争開戦前夜から登場し、当初から敵対国と位置づけられ、(敵)としてイメージ化されていた。つまり、敵としての属性がロシアには付与されねばならなかったのである。そして、ロシアの形象化とは、ロシアという具体的な相手を想定し前提とした言語的实践を通じて、特定の他者が「敵」として実体化されていく過程そのものであった。

それは、一方でロシアが(強大)であることを主張しつつ、その一方でロシアが(腰抜け)であることを強調するという矛盾した形であらわれる。たとえば、「聞けば敵も名に負ふ世界中の強い国でいますから」(霜廻舎主人「西班牙の烈女」、第四卷三号、明治三八年二月)、「支那よりもっと大きい、しかも世界中で大変強い国」(せきへう「おつるさん」、第三卷第九号、明治三七年九月)、「敵は名におふ露西亜のことですから」(神谷鶴伴「兵士の首途」、同上)というように、

ロシアの強大さを際立たせながら、同時に「敵の艦隊とて、いくら腰抜艦隊の、ぶらぶら艦隊の、うろろう艦隊の、ひよろひよる艦隊の、間抜艦隊の、弱虫艦隊でも……」（「令嬢鑑 松村麻子嬢」、第四卷第八号、明治三八年七月）というように、ロシアの脆弱さを誇張する表現も混在している。

こうした分裂した言語表現によって構成されるロシア像は、一見、〈強大〉だが〈脆弱〉であるという両義性をはらんでいるかのように映る。だが、ここには、ある一定の方向づけが認められる。「支那よりもっと大きい」という領土的な広大さや、「世界中で大変強い国」という軍事的な強度が強調されることで、〈敵〉というある問題の規模が、数値的な根拠のないままに漠然と見積もられ、曖昧な脅威と不安が読み手の間で拡大していく。そして、直面している事態の深刻さが認識され、そこから影響を受ける可能性が日本の国民であれば誰しもあるという切迫した問題が想定されるようになる。だが、「腰抜艦隊の、ぶらぶら艦隊の、うろろう艦隊の、ひよろひよる艦隊の、間抜艦隊の、弱虫艦隊」等の、ある種の虚脱感が生み出されるような主観的な表現を反復することによって、敵の弱さや価値の低さが際立ち、ロシアはそもそも劣位に位置づけられるものとされ、議論の余地さえ持たなくなる。そこに、「腰抜」や「ひよろひよる」、「間抜」や「弱虫」という価値が付与される論拠は特に具体的に示されてはいない。読者投稿欄である「ことばづけの答」にも、たとえば「づるい」とは「の問いに対する答」として「ロシアの政治」や「ウキツテの返答」（第四卷一一号、明治三八年一〇月）、「くろいことは」の問いに対する答（第四卷一四号、明治三八年一一月）、「ぬす人の心」や「うそを云ふ人の心」の後に「ウキツテの腹」や「ロシア人のはらの中」（第四卷一二号、明治三八年一一月）といった文言が続く。これらは、すでに〈少女たち〉の間でロシアが負の価値を持つて語られていることを示しているように。

このように見れば、〈ロシア〉は、それが〈敵〉であるという問題の共有感覚と、それゆえに否定されるべき価値を伴いながら二重に構造化された形象として、一定の方向づけがなされていることがわかる。そして、そのことは、日露戦争期の少女雑誌において、「世界図」の中に〈ロシア〉という他者の領域を設定し、そこに〈敵〉という名を与え、それ以外の論点を排除しながらトピックを定め、ロシア像を形成する——つまり〈ロシア〉という領域が問題化していく前提となっている。

二、「露西亞」という空白

こうした前提により、〈敵〉という一つの領域としての〈ロシア〉の問題化が成立するのだが、戦争においてはその問題を解決ないし克服することは〈戦勝〉を意味し、雑誌メディアはその〈正当〉な論理を読者層に訴えかけ説得する必要がある。なぜ〈戦勝〉という帰結が必要なのか、そしてこうした結論をもたらすためにはどのような方法がとられるべきなのか、その論拠となる部分について、ここでは検討したい。

イギリス等の欧米列強の帝国主義的まなざしへの同化によって構築された、日本の「世界図」において、ロシアが具体的な脅威として浮上したのは、先述のように、日露戦争期であろう。

だが、明治三六年から三八年までの間、「少女界」の目玉である「お伽話」のコーナー上に「露西亞」の語があらわれるのは、日露戦争直後の明治三八年二月号（第四卷二三号）に掲載された、泉星峨「露国お伽話 無上の幸福」が唯一のものとなっている。そこには、「是は私が播州の姫路へ参りました時に同地に収容されて居ります露国の捕虜が語つた露西亞のお伽話であります」という聞き書きの注

記が冒頭に付されている。これは、ある国の二人の王子のうち、後継ぎと目された次男の花嫁選びにあたって謎かけがあり、それを解いた心映えの美しい女性がお妃になる話である。それは、ロシアの魔法民話において類型化される、いわゆるシンデレラ・ストーリーの一種である。

ここで注意を要するのは、冒頭に「収容されて居る」露国の捕虜が語った」という修辭が付されている点であろう。それが事実か否かはさておき、この修辭は〈必要〉だったと考えられる。これを冒頭に掲げることにより、日本が収容した「露国」「捕虜」に「語らせる」という前提が成り立ち、そこにはロシアに対し優位に立つ日本という構図が透けて見える。その上で、さまざまな地域文化においてある種の〈共通性〉を持つ型の寓話が示されるのである。

ただ、この「御伽話」を除外すれば、「少女界」では、「露西亞」「ロシア」「ロシア」「露国」という語が確認されるのは、日露戦争時の日本のある家庭を御伽噺仕立てで父と子の別れの悲哀を描いた作品が二編と、雑録、また読者の投稿による詩や俳句、ことばづけ（謎かけ問答）にとどまる。このように、「少女界」において、「露西亞」等の語の使用頻度が高いのは、「日露戦争」に関する記事であり、それは、とりわけ「雑録」欄の「軍人の家庭」という訪問インタビューをもとにした実話の語りにも多く用いられている。すなわち、ロシアは具体的イメージを持ち難いものとなっており、あくまで対戦国（ロシア）という枠組みが、揺るぎない強度を持って提示されるにすぎないのである。なお、この二年間の「少女界」で、「戦争」「戦地」「バルチック艦隊」「旅順陥落」「海戦」等を含めれば、日露戦争に関わる語は、少なくとも一四二件、抽出できる。それは、先述の〈ロシア〉に関わる語の五倍を超える数である。このことは、当時のロシアのイメージが日露戦争と切り離せないものであったことを物語ってしよう。

このように見れば、確かに、少女雑誌に描かれるロシアは、ほぼ「日露戦争」との組み合わせによるものであり、その意味では戦争と一体化するようにしてロシアが形象化されると考えられる。ただ、この見方にはいささか注意を要するだろう。例として、「少女界」の目次と同時期の少年雑誌「少年界」の目次とを比較してみる。

日露戦争中の明治三十七年十一月に発行された「少年界」の目次は、神谷鶴伴「日露戦記」、米光關月「少年水滸伝」、谷活東「鳩の出陣」、され山人「独仏の戦争」、西村矛山「軍隊の話」など、ほぼ全面にわたり軍事色に彩られている。それに対し、同年同月発行の「少女界」の目次は、田村松魚「宝石の報い」（御伽噺）、霜の舎關月「木村重成の妻」（学芸）、訪問記者「軍人の家庭」（雑録）、「夢日記」（雑録）というように、武士の「妻」や軍人の「家庭」は登場するものの、「少年界」に比して、間接的な戦争への関与が示されるものとなっている。つまり、少女たちの前に展開されるのは、家や家庭を媒介とする戦争だと考えられる。こうした少年雑誌と少女雑誌に見られる差異は、「少年日露戦記」（明治三十七年）、郁文舎、積文社）のように、少年を対象とした戦争雑誌がある一方、少女を対象とした戦争雑誌は見当たらないという、特定雑誌の存在の有無によっても確認されよう。

「少年界」の構成や内容が、戦争への直接的な参与を物語り、具体的な姿を伴うようにしてロシアを〈敵〉として形作っていくのに対し、「少女界」の場合は、〈敵〉という概念および否定すべき対象という価値のみを提示し、むしろその姿を見えないものにしていく。「少女界」において、〈敵〉としてのロシアの具体像は見出せない。また、実戦に関する表現も、「露西亞の軍艦を滅茶々になさい」（「軍人の家庭 三須みよ子嬢」、第三卷第七号、明治三十七年七月）や「露西亞の軍艦を撃ち沈める」（「令嬢鑑 松村麻子嬢」、第三卷第七号、明治三十七年七月）というように抽象的なものであり、語彙も限定的でバリ

エーションが見られない。そこにあるのは、ただロシアを〈敵〉と見なすという認識の布置、すなわちロシアという問題の領域を成立させる前提そのものである。それは、一方で家を介した戦争への関与が期待されながら、一方で戦地から遠ざけられるという構造の中に〈少女たち〉が置かれていることを物語っている。そして、ここに戦争に関わる〈少女〉のありようという新たなモデルが創出されていると理解することもできよう。¹¹⁾

ロシアは〈敵〉であるという大きな前提から、論拠を欠いたまま〈戦勝〉という目標を掲げた大きな結論もまた含まれている。それは、「少女界」という体裁をとった小さな結論もまた含まれている。それは、「少女界」に明治三十七年七月号から「雑録」欄に特設された「軍人の家庭」や、その進化版である「令嬢鑑」と題されたインタビュー記事のコーナーの話題に見ることができる。日露戦争期のごく限られた時期に、父親や兄弟、伯父／叔父らが従軍した各家庭を記者が訪問し、そこでの婦女子の様子を聞き書きし、賞賛文句を交えつつまとめたものが連載されている。この「軍人の家庭」欄の、日露戦争で武功をたてた一家の物語には、基本的な軸が次のように設定されている。①父親の武功、②一家の住所と家族構成や身分等、③父親の洋行体験、④父親の武功のより具体性をもたせた反復、⑤父を戦地に送り出した母親の様子、⑥父親を支え父親不在の家庭を守る婦女子の挿話、という流れがあり、これに沿うようにして、銃後の女性のあるべき姿が映し出されており、そうした価値に根ざした話型を有している。それは、女性の模範像の提示を通して〈少女〉という読者層を啓発する。と同時に、¹²⁾具体的な家庭情報によって登場人物に親近感を持たせることで、模範像としての〈彼女〉が〈私〉になり、〈私〉が〈私たち〉となるように、身近な他者の存在が意識され、結果的に戦争協力へと導いていくような説得性を持ちえたのではないかと考えられる。

また、「少女界」は、戦争への直面といった社会的かつ非日常的な領域と、家庭・生活を営むことといった個人的かつ日常的な領域とを、「軍人の家庭」の言語化を通して連結させている。国家の名のもとに戦争が遂行され、人々の身近に死がもたらされることと裏腹に、近代国家である日本の発展に身近なところで寄与しうる論理を共有するという状況の中で揺らぎながら、「少女界」は短期間に「軍人の家庭」という物語を構築しようとして試みている。だが、それは、第四巻一号（臨時増刊）での同時代の公人であった女性（下田歌子、津田梅子、大山捨松子ら）の物語化を経て、日露戦争後の明治三十八年一〇月以降の「少女界」において、「令嬢鑑」という一つのカテゴリーとして、会話文の多い、よりフィクション性の高い物語へと変貌し、その後消えていった。

このように、「少女界」におけるロシアは、「露西亜」や「ロシア」という一つの問題領域として設定され、その前提となる〈敵〉としての認識や価値が強調されている。その一方、結論に至る論拠を欠落させたまま、〈戦勝〉という大きな目的（解決）の共有と、その帰結に向かう〈啓発〉や〈協力〉という小さな結論（方策）が情緒的な連帯感を持って前景化していくという構造を有している。そして、その中で、ロシアは敵／味方の二分法による〈敵〉の枠が強調されることになったが、その論拠となるデータが不足しているため、具体性を持つ形象としてあらわれえず、この問題はある種の空白を伴う曖昧な負の領域として出現することになったと考えられる。

おわりに

以上、日露戦争前後の「少女界」において、国家的・文化的・民族的事象に関わる言説を資源として、総体や概念としての〈ロシア〉が

どのように領域として問題化されたかについて検討した。そして、これはどのような価値に基づいたものであったのかに言及し、これを前提にいかなる論拠と結論が提示され、そこにどういった構造が浮上するかに関して検証を試みた。さらに、そこから立ち上げられるロシア像はどのような領域として形成されえたのかという点を中心に考察した。

その結果、まず〈ロシア〉は、「文明国」とそれ以外と二分する「世界図」の中で、「文明国」を優位のものとして価値づける認識のもとに、非「文明国」と位置づけられていくことがわかった。つづいて、日本がイギリスと同盟関係にあることを強調する修辭を補助線としつつ、間接的に〈ロシア〉が劣位に措定されていた。そして、その構図下で、ロシアを〈敵〉と見なす共有感覚と否定されるべき価値とを大前提として、問題領域が設定され、限られたトピックによってロシア像が形成されていることが明らかになった。さらに、具体的な相手を想定した上での言語的实践を通じて、特定の他者が〈敵〉として実体化されるような形で、「少女界」におけるロシアも〈敵〉としての属性を引き受けながら形象化されていったのではないかと理解される。また、「少女界」におけるロシア像は、〈戦勝〉という最終的な結論の共有と、そのための〈啓発〉や〈協力〉といういくつかの帰結が、情緒的な連帯感を喚起するような話型を用いて示されることと連動していた。だが、そうした過程で、ロシアは〈敵〉でありそれに戦勝せねばならないとする論拠が十分に示されていないため、その形象が具体性を有してはいない。よって、ロシアという問題は曖昧な負の領域として立ち上がったと考えられる。それは少年雑誌に見られる傾向とは異なるものとして捉えられうるものであり、そうした意味においては、〈少女〉は、ある面では政治や戦争から退けられ、またある面ではそこへ取り込まれるような、可動域を持つカテゴリーとしての性質を持つ

ていたのではないかと考えられる。以上が本稿で調査した範囲での結論だが、明治三七年〜三八年発行の「少女界」全二五冊のうち、六冊が未見であるため、今後それらを分析した上で本稿での結論を再検討する必要がある。

このように少女雑誌におけるロシア像を検証するということは、果たしてどのような意味を持ちうるのだろうか。「少女界」の言説の分析を通して、日清戦争後の〈少女〉という存在が立ち上げられる中で、日露戦争のプロセスと密接にかかわる形で規範化されていくロシア像とその形成過程が明らかになる。それは、ロシアという他者に対する少女雑誌の作り手たちの認識を示すものとして、社会的コンテクストへと一般化しうる可能性を有している。それとともに、投稿欄への参与という形で、書く主体ともなった〈少女たち〉の間で、どういったロシア像が形成されていったのかを知ることでもできる。その結果と、先述のロシア像との差異を検証することによって、雑誌情報を資源とするイメージの再生産される過程が可視化されるようになり、ひいてはメディアの構造や機能へと論を敷衍していく道筋も開けよう。

本稿で取り上げた「少女界」以外にも、「少女世界」といった少女雑誌を一見すれば、ロシア像が御伽噺、写真、通信等の様々なジャンルを横断する形であらわれており、多様なまなざしの交差する中で構造化されていることがわかる。ロシア像が、メディアという媒体により、どのように生産ないし再生産されていくのか、そして異文化イメージの構築にあたり、オーディエンスとしての〈少女たち〉がいかに能動的にかかわるのかについては、今後の検討課題としたい。

注

(1) 安藤恭子「メディア分析から見た「赤い鳥」」(『日本児童文学』第四

四巻四号、一九九八年八月）十四頁。安藤は、「世界図」を「時代・社会の価値観、世界観、思想といった概念によって区分され、人間の身体に内面化された〈心象地理〉」と定義している。本稿では、この定義にもとづいて、「世界図」の語を用いることとする。

(2) 菅聡子・藤本恵「〈少女小説〉の歴史をふりかえる」(菅聡子編『少女小説』ワンダーランド、明治書院、二〇〇八年) 八頁(菅聡子記)。

(3) 創刊号(明治三五年四月十一日発行)の奥付において、主任の岡本常次郎による「小学校生徒の読物として適切な雑誌の乏しきを概き今般更に少女界と題する雑誌を発刊し専ら女兒の爲めに好伴侶たらんとす」という文章が掲載されており、「少女界」が対象読者を「女兒」に限定した雑誌であることを明確に定めている。

(4) 大正元年より、発行元が金港堂から大洋社に変更された。

(5) 原田敬一『日清・日露戦争』(岩波書店、二〇〇七年) 一八二頁。

(6) 菅聡子、前掲、六頁。

(7) 同右、七頁。

(8) この時期に刊行された巻号のうち、第三巻八号、第四巻三号、第四巻四号、第四巻六号、第四巻九号、第四巻一〇号については、稿者が調査を行った熊本県菊陽町図書館において欠号であった。このうち、第三巻八号、第四巻四号、第四巻九号、第四巻一〇号については、東京都立多摩図書館に所蔵されており、今後の調査に譲ることとする。

(9) 三宅興子の指摘にある通り、「一九世紀末から二〇世紀にかけて、絵本が発達し、「世界」Worldとか「世界」All Nations」という語が出てくるようになった。イギリスはその植民地主義がピークに達したときであり、絵本にみられる「世界」というテーマは、二〇世紀前後に出版された絵本の新しい題材になった。異なった国やその文化を理解する題材が、年少の読者を対象とするものの中にも数多く見られるようになってきたのである」(三宅興子「他国のイメージはどのようにつく

られたか——イギリスの子どもの本のなかの日本および日本人を中心に、「梅花女子大学文学部紀要 児童文学編」第三七号、二〇〇三年、六八頁)と見れば、日露戦争期に「世界」という語が少女雑誌に登場したことも、こうしたイギリスの動向に関連付けて考えられるのではないかと思われる。

(10) なお、以下、「少女界」からの引用にあたっては、旧字体を新字体に改めている。また、傍線はすべて稿者によるものである。

(11) 拙論「少女たちの〈ロシア〉——明治期の雑誌を中心に」(濱田明・溝瀾園子編『日仏露国際ワークショップ 文化の翻訳／翻訳の文化』、熊本大学文学部文化接触研究会、二〇〇八年)。

(12) この「軍人の家庭」には、他にもいくつかの共通する要素を持っている。一つは、「これも、梨羽少将と共に、旅順の海戦に、敵の艦隊を打ち破られました第三戦隊の司令官海軍少将三須宗太郎君に：(後略)：」(「軍人の家庭 三須みよ子嬢」、第三巻第七号、明治三十七年七月)のように、まず従軍した血縁男性の勇猛ぶりが強調される点である。もう一つは、従軍する男性たちを見送りさびしく心細いが耐えて家庭を守る女性の姿が賞賛の目をもつて繰り返し描かれることにより、戦争時の女性のあるべき姿として規範化されている点である。さらにもう一つは、父親の洋行体験が必ず挿入されている点である。そこに列挙される国は、イギリスやドイツ、フランスに限定される。また、時に母親の受けた教育体験について触れられる場合もあるが、それは稽古事の他に外国語習得についてであり、その外国語とはほぼ英語もしくはフランス語である。軍事訓練の洋行にせよ、言語の習得にせよ、親の西洋文化体験というものに一定の価値付けがなされていたことがわかる。

[付記] 本稿は、二〇一〇年七月三十一日、台湾国立政治大学にて開催さ

れた世界日本語教育大会において口頭発表した内容をまとめ、それに修正を施したものである。なお、修正にあたり、日本学術振興会学術研究助成基金助成金基盤研究（C）課題番号二三五二〇四三八「近代雑誌メディア文化におけるジェンダーと異文化表象の編成に関する日露比較研究」の助成を一部受けている。